慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	本邦俠客の研究(尾形鶴吉著, 博芳社發行)
Sub Title	
Author	宇宿, 捷(Usuku, Sho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.174- 175
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

によつて傳へられし五臺山念佛教の普及の後に夙に傳はり居りし善導の著述が、教義組織の指導として、新に法然上人等によつて研究され、此に淨土宗義組織開創となつたのである。「然らば日本の念佛教は唐の史實を逆に、先づ法照念佛教によりて開拓せられ、次で善導淨土教によつて組織大成せられたものと云ふべきである」（三四八頁）と結論されてゐる。

以上にて大體の內容を紹介し終りたのであるが、著者が異常なる勢力を以て善導以後の支那淨土教の暗黑面に多大の光明を投ぜられたことは、獨り支那佛教史、日本佛教史研究者のみならず、我々東洋史研究の者、殊に唐代文化史研究者を益すること大なりと云ふべきである。我々は著者が如此研究態度を以て、支那淨土教のみならず、支那佛教史全般に亙りて、その研究を大成されんことを希望して止まない。（昭和九年二月十日、太田達雄）

本邦俠客の研究（尾形鶴吉著　博芳社發行）

戰國時代に於ける殺伐輕死の傾向は、德川氏の世となりし後も止まらず、質素、剛勇、廉耻といふが如き、善き半面の存在すると共に、殺伐慘酷なる弊害も少くなかつた。武を尊び義に勇むの極、却つて秩序と平和とに對する反抗として現はれ、職業的に或は非職業的に、俠的行爲を演出し、諾を重んじ、弱きを扶け强きを挫くを主義とせる、所謂「俠客」に對する從來の研究は、吾人の滿足し得る所まで到達して居らぬ。かゝる際、俠客の發生、轉化、存在を語る全貌史であり、他面德川封建社會崩壞過程を摘出せる、考證史として、「本邦俠客の研究」を、宮內省圖書寮囑託にして目下有職の調査に從事中の尾形鶴吉氏に依りて、刊行せられし事は、欣快に堪ぬ事である。

「俠客」なる語は、彼等が江戸時代に於ける、庶民階級進出の最先驅者として、社會史上不滅の足跡を留め、あまねく民衆に依り喧傳せられ、且つ讃仰せられしにかゝはらず、從來史的研究對象としてはやや等閑視せられし問題に付き、種々なる觀點に立ちて試問し、檢證し、俠客の存在現象を、常に動的史觀の展開を信條として著述せられしものにして、こは本書の生命とする所である。

かゝる課題を擇ばれし動機に關し、著者は次の如く其の緒言の中に於て述べて居られる。

「從來彼等に對して與へられた諸々の史的研究は、自分にとつては少くとも二つの點に不滿を感じさせられたのであつた。卽ち其一つは、彼等の個別的行爲に就いては、細心至らざるなきまでに鼓吹されて居るが、彼等の培養素地であり、普汎的契機とも稱すべき當代社會への關心が、等閑に附されて居た觀がある事である。云ふまでもなく、歷史の生命は、個別事象と全體事象との相關的動的發展過程の迹付にある筈である。此理を忘却しては、如何にしても、複雜なる關係の下に織られた俠客史への徹見は、屬望し得ない。他の一つは、其が餘りにも、社會機構の主要體なる下層庶民の歷史を等閑視して彼等活動の業績を抹消し、上層階級の歷史へ媚態を呈した事である。茲に於て自分は、斯る史觀を排し、本邦俠客史上の代表的本流たる三大都——江戸、大阪、京都——を始めとし、其他、地方城下町、或は僻陬の地域に活躍した有名

無名の俠客を、拉し來つて、封建社會と關聯せしめつゝ考量した」とあるによつても、本著の目的の概略を窺ひ得らるゝ事と思ふ。

本書は、第一章俠客の概念、第二章俠客を中心とせる江戸時代社會概念、第三章俠客發生の原因、第四章俠客に對する幕府の態度、なる四章、二十三節より構成せられ、その內容は繁雜にわたるを以て省略する。

要するに、著者が俠客なる課題の上にこの研究を進められ、常に偏する事なく、高位の普遍的命題の下に內的批判を試み、而も動的史觀を信條とし、綜合せられしを喜ぶも、資料の選擇の點に今少しく留意せられんことを望む次第である。本書は、歷史家は勿論、江戸時代の研究に從事せらるゝ、諸賢に一讀せられんことを御薦めする。終りに臨みて、著者は將來俠客の發生、轉化の誘因を、精神的、經濟的、更に政治的、社會的、法制的の多方面より考量せられ、其間素因と動因との二大分野に、その研究を進めらるゝ由、その大成の日を渴望し擱筆する。

（昭和九年二月一日　宇宿　捷）

越前若狹古文書選（牧野信之助選輯　三秀舍發行）

本書は三秀舍創業三十年記念出版の一である。所收古文書の數實に七百餘通、その間幾多の精巧な實物寫眞を挿入した豪華版である。所收古文書は、大正五年より同十年に亙り福井縣に於て編纂されたる福井縣史の材料となりし「稿本福井縣史料集」並に選輯者牧野氏の手控よりその粹を拔いて集錄せられたものであつて、これを地方別に配列し、文書所有者毎にその所載文書について簡單なる解說を附し以て文書の理解に便ならしめてゐる。

選輯者牧野氏は本書卷頭に「越前若狹に於ける古文書の分布」なる一文を揭げて、該地方の古文書につき綜觀をなしてゐるが、それによれば、此の地方に古代文書の稀少なのは奈良朝以降平安・鎌倉時代にかけて未だ中央に對し戶口稀薄にして好箇の開拓地たり、從つて文書は自然中央に保存せらるゝ事情にあつた爲となし、更に源平以來南北朝より朝倉氏時代にかけての戰禍は由緖ある大社寺の什器を多く失はしめ、また元龜天正の交、信長の一向宗一揆に對する攻伐に於て社寺の多く燒燼せる爲め亡失せる記錄も少なくなかつたであらうとせられ、從つてこの地方の古文書の時代が著しく降下せる事情を說明して居られる。文書の種類については、土地制度に關するものとしては大閣檢地のもの、村落に於ける山割土地割の規定證などが多く、村落制度に於ては中世以來の刀禰制度に關する文書に注意すべきものがあり、中世末から近世初頭にかけての商業上の史料中には座及び問屋に關するものが、奧羽・西國へかけての海上交通史料と共に福井及び各港市に多く存し、更に庶民階級のものでは馬借・木地挽・舞曲・陰陽等に好史料となるべきものが隨所に存して居り、又宗教史料として特筆すべきものには名僧の自署文、一向宗一揆に關連して本願寺の顯如・教如・准如等の消息もしくは專修寺眞智の書狀、又は一揆の一首領賢會の陣中密書の如き特殊のものありとなし、武將文書としては朝倉孝景・柴田勝家・松平秀康・本多富正・酒井忠勝等のもの多く、その他幕末維新に於ては福井・大野藩など目覺ましい活動をなしてゐるが、所藏者が土地を離れた爲に此の地に存する